

ふるさと安曇野  
きのうきょうあした

# 安曇野の屋敷林

No.18 2019.2.9



## 屋敷林とは？

安曇野には、屋敷内の家屋の周囲に人為的につくられた樹林が数多くみられ、これらは時に樹高20m以上に及ぶ樹林を形成し、平地に点在あるいは集落にまとまってみられます。これらの樹林は屋敷林と呼ばれ、北アルプスを背景に安曇野の景観をつくりだしています。長野県内では特に松本平に多く、松本市北部から安曇野市、松川村にかけてみられます。

屋敷林は全国各地にみられ、太平洋側では仙台平野（宮城県）、那須野原（栃木県）、武蔵野台地、日本海側では砺波平野（富山県）、出雲平野（島根県）などの屋敷林が有名です。また海岸に近い伊豆諸島、房総半島、南四国、南九州などでも広くみられます。屋敷林を構成する樹林の形態や樹種は、地域や機能に応じてかなり多様です。

ここでは屋敷林を「屋敷内の家屋の周囲に人為的に植栽された樹林」と定義しています。自生した樹木が含まれる可能性はありますが、安曇野市内の屋敷林はほとんどが人為的な植栽によると考えられるためです。

## 屋敷林は何のために？

そもそもなぜ安曇野に屋敷林があるのか、その説明としては「特有の激しい南東風や、冬季の寒い北風を防ぐために常緑針葉樹が多い」（南安曇郡誌）、「安曇野では強い南風が吹くために、安曇野の中央部の屋敷林は南側が多く、板葺屋根や茅葺屋根を守るためであった」（豊科町誌）といった記載があり、防風林としての役割があるとされています。屋敷林はこれまでの研究報告からも、冬期における防風・防雪効果、夏期における防風・気温調整効果が認められています。

また昭和30年代まで日常的な煮炊きには、主なエネルギー源として樹木が利用されていました。屋敷林のスギの葉は焚き付けに、落葉広葉樹の枝葉は薪や堆肥として生活に必要なものでした。屋敷林は平野部において里山的な役割をもっていたのです。スギやヒノキは、用材として利用するために戦後に植栽されたものも多くみられました。

また各屋敷林の調査結果から、樹高の高い樹林は庭園の周りに植えられて、庭園の空間を構成していました。屋敷林は庭園と一体になっているようです。

## 屋敷林の樹木調査の方法

当博物館では、2017年から2018年にかけて安曇野市内の8軒の屋敷林について、樹高3m以上の樹木を調査しました。全国的な屋敷林の形態をみると、高生垣も含めて3m以上であることが一つの目安と考えられたためです。これら調査対象樹木について、樹種、樹高、胸高直径（20cm以上）、位置を調べました。調査した樹木は全部で839本にのぼりました。

### 常緑針葉樹で7割を占める 一番多かったのはヒノキ

1～3位までの樹種が突出して多く約半数を占めました。また常緑針葉樹が全体の71%を占めています。

1位のヒノキは有用な植林木としてよく植栽される樹木です。東日本の屋敷林ではスギが優占する屋敷林が多いのですが、安曇野ではヒノキの方が好まれています。2位のイチイは庭木の植栽木や生垣などに大変よく植えられる樹木です。

サワラが6軒の屋敷林で見られ、33本と比較的数が多いことは、安曇野の地域性をあらわしていると考えられます。

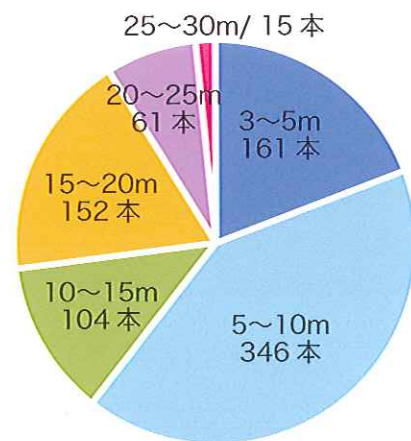
### 樹種の上位10種とその本数

	樹種	本数	%
1	ヒノキ ●	171	20.4
2	イチイ ●	139	16.5
3	スギ ●	117	13.9
4	モミジ類 ●	57	6.8
5	サワラ ●	33	3.9
5	アカマツ ●	33	3.9
7	ケヤキ ●	27	3.2
8	チャボヒバ ●	23	2.7
9	ビャクシン ●	21	2.5
10	ネズコ ●	14	1.7
	合計	635	

- 常緑針葉樹
- 落葉広葉樹

### 樹高3～10mが約6割 樹高20m以上の高木が76本

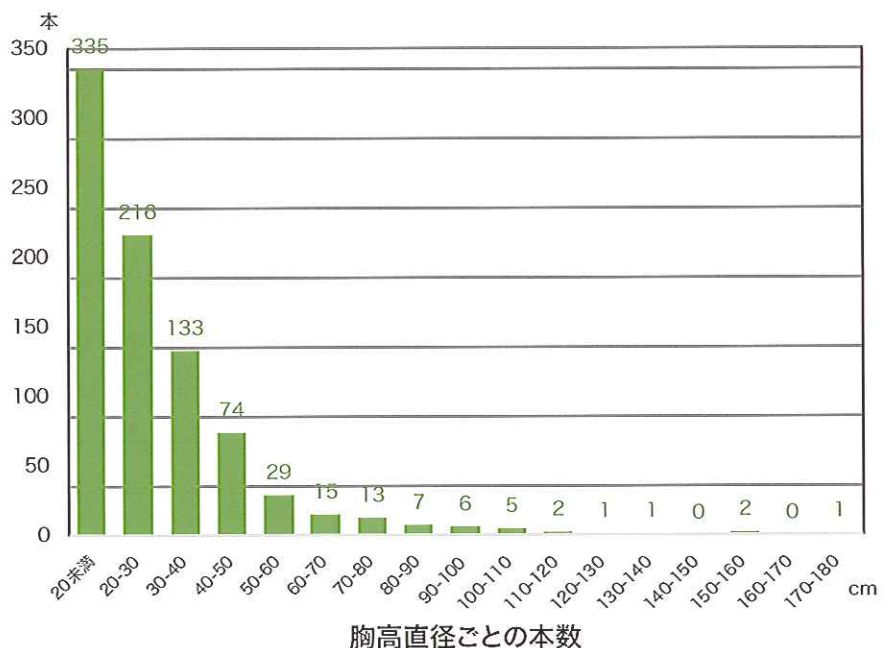
樹高10m以上になると、景観的にもまた防風の機能としても樹木の存在が増してきます。樹高10m以上ではスギ、ヒノキ、サワラ、ネズコといった常緑針葉樹に加えて落葉広葉樹のケヤキが多くなります。これらが主に屋敷林の景観を構成している樹木です。



樹高ごとの本数

### 胸高直径30cm未満で65%を占める

樹木の成長量は立地環境によって大きく左右されるため、樹齢を推定することは難しいのですが、30cm未満のヒノキやスギは、樹高を勘案しても、戦後に植林されたものと考えられます。

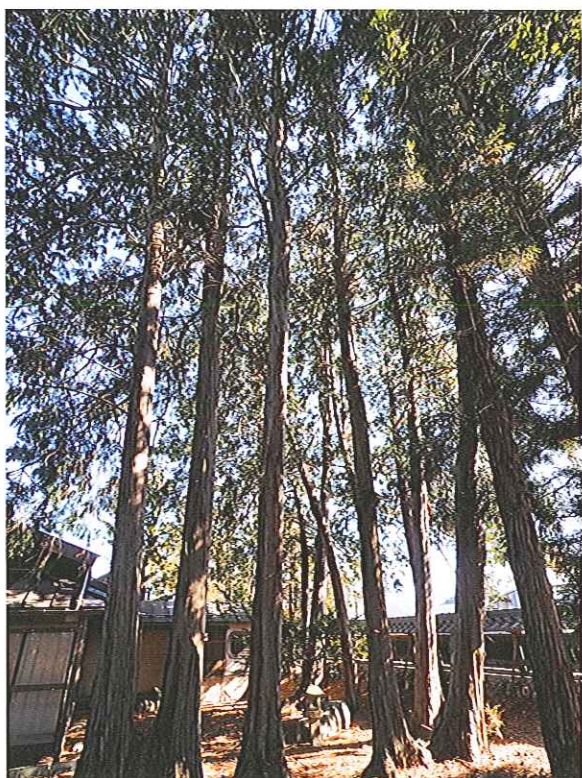


## 木曾五木のはなし

「木曾五木」とは、ヒノキ、サワラ、ネズコ、アスナロ、コウヤマキの5種の樹木のことを指します。

木曾地域はこれら樹木の美林地帯で、古来から社寺や城館建築の主要材の生産地でした。関ヶ原合戦後、江戸幕府は直ちに木曾山を幕府御林とし支配下におきました。その後、尾張藩領となりますが、材木の採出は厳しく管理されました。1728(享保13)年に「御停止木(ごちょうじぼく)」(伐採禁止木)として木曾五木が確定します。盗伐などの罪を犯すと厳罰に処せられたことでも有名です。こうして木曾五木は非常に価値のある樹木として、広く知られてきました。

安曇野市北アルプスの山林には、サワラやネズコが多く自生しています。特にサワラは建材や屋根板として、この地で古くから利用されてきた樹木です。安曇野の屋敷林に木曾五木が植栽され、ヒノキやサワラが多いことは、こうした歴史や価値観が反映されていると考えられます。



ヒノキが多く植えられた屋敷林 (豊科)

## 安曇野の風向風速

防風が目的とされる屋敷林ですが、ここでは基本的な資料として、風向風速のデータを整理しました。1979～2017年における松本・穂高・大町における日最大風速の平均値と日最大風速の最も多い方向を下表に示します。3地点とも、最大風速は4月の春先をピークとして、9～10月頃には最も低い傾向があります。春先の強い南風は松本平に暮らしていれば、多くの方が実感として経験することです。地域別にみると、1年を通じて松本が最も風速が強く、次いで大町、穂高は3地点の中ではもっとも低くなっています。

風向については、穂高では北北西の風が最も多く、2、5、10月は北東寄りの風が多くなっています。松本は年間を通じて南風が多く、大町はすべての月で北北東の風でした。

松本・穂高・大町における日最大風速の平均値と日最大風速の最も多い方向 (1979～2017年)

(数値の単位: m/s)

	松本	穂高	大町
1月	5.2 南	3.4 北北西	4.5 北北東
2月	5.3 北	3.7 北北東	5 北北東
3月	5.9 北	4.2 北北西	5.6 北北東
4月	6.3 南	4.5 北北西	5.8 北北東
5月	6 南南東	4.1 北東	5.3 北北東
6月	5.3 南南東	3.4 北北西	4.3 北北東
7月	5.4 南	3.4 北北西	4 北北東
8月	5.3 北北西	3.3 北北西	4 北北東
9月	4.9 北北西	3.1 北北西	3.8 北北東
10月	4.8 北	3 北東	4.1 北北東
11月	5.1 南	3.3 北北西	4.5 北北東
12月	5.3 南	3.4 北北西	4.5 北北東

## 屋敷林は庭園と一体となり、 その家の格式をあらわすシンボリックな存在

各屋敷林の調査結果から、安曇野では樹高の高い樹林が庭園の周囲に配置され、庭園の一部にもなっている傾向がありました。つまり鑑賞される対象であるということです。同時に、庭園というのはその家の格式をあらわすシンボリックな存在でもあります。立派な庭園や樹林をもつことによって、その家の存在が社会に示されることになるのです。こうした価値観はほかの地域の屋敷林でもみられます。このことから屋敷林の樹木は防風効果だけでなく、庭園樹として植栽されたケースもあったと考えられます。

本調査では、対象樹木を樹高3m以上としたため、観賞用の庭木はある程度除外されましたが、花や紅葉の美しさを楽しむ目的の樹木や、果物や山菜を得るために植栽された樹木も少なくありません。屋敷林は庭園と一体となって、現在の暮らしの中に受け継がれています。



庭園を背景に記念写真（穂高・年代不明）



庭に巨石を埋めた際の記念写真（穂高・昭和10年頃）

## 屋敷を守り、一族を守る<sup>やしきがみ</sup>屋敷神

歴史のある家には、屋敷神がまつられている場合が多々あります。文字どおり屋敷を守り、家族安全・息災を守ってくれる神と考えられています。時には同姓（一族）を守ってくれる神ともなっています。したがって、祭りも屋敷神がある家で行う場合、同姓が集まって行う場合など様々です。まつる神も様々で、稲荷が多くまつられていますが、諏訪大明神・伊勢の皇大神宮をまつる、などいろいろです。



度重なる洪水に、水防のために伊勢神宮から勧請してきたという屋敷神。祭りは8月、当のみで行っている。（豊科）

## 平野部における貴重な大径木

屋敷林には、あまり平野部ではみることのできないような大きさの樹木が存在しています。巨木のひとつの基準として、環境省が1998年に全国の巨樹・巨木調査を行うにあたり、「地上130cmの位置での幹周りが300cm（胸高直径が約95.5cm）以上の樹木」を調査の対象としました。本調査でこれに該当する樹木は13本ありました。

胸高直径70cm以上の樹木は38本あり、もっとも多い樹種はケヤキですが、いろいろな樹種がみられ、地域の自然植生を反映した樹種が多いようです。樹齢も相当高いものと思われます。

こうした大径木は平野部では歴史ある社寺など限られた環境にしか残っていない、大変貴重な樹木です。しかしその一方で所有者の管理の労力も大きく、負担になっている現状もあります。



胸高直径 175cm にも及ぶケヤキ (三郷)



モミジ類の中で最も多く植栽されていたオオモミジ (堀金)

### 安曇野の自然植生を映し出す樹木たち

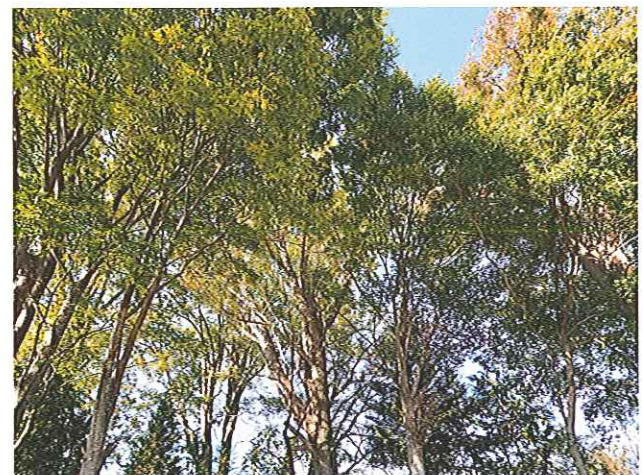
三郷村誌 (2004) には、アカマツ・カシワ・カエデ類はこの土地のものが植えられた、という古老の庭師の話が紹介されています。昔は庭木の苗木は現在ほど流通しておらず、身近な山林から採取する機会が多かったと思われます。

屋敷林で確認された樹木のうち、地域の自然植生にもみられる樹種として、常緑針葉樹のアカマツ、チョウセンゴヨウ、モミ、コメツガ、サワラ、ネズコ、落葉広葉樹のシラカンバ、カツラ、オオモミジ、コミネカエデ、コハウチワカエデ、ハリギリ、クヌギ、クリ、カシワ、ケヤキ、エノキ、ニシキギ、カスミザクラ、ヤマボウシ、ソヨゴ、ヤマグルマ、オオバクロモジ、シナノキなどがあげられます。

屋敷林に亜高山帯に自生するコメツガがみられたり、モミジ類57本のうちオオモミジが約半分を占めるなど、地域の自然植生が反映されており興味深いところです。



剪定されたコメツガ (三郷)



ケヤキやエノキなどの落葉広葉樹の大径木で構成される屋敷林 (豊科)

## 平野部に緑の回廊をつくる屋敷林

屋敷林は人間によってつくられた樹林ですが、社寺林や河畔林とともに、安曇野の平野部で「緑の回廊」を形成しています。

ここでは屋敷林に生息する野生の動植物をご紹介します。ある屋敷林ではフクロウとオオタカが、ねぐらや休息場所、獲物の解体場所として利用していました。これら猛禽類は生態ピラミッドの頂点に位置しており、周辺地域の生態系が豊かであることを示しています。周辺には農耕地が広がっており、オオタカはそこに集まるドバトなどを、フクロウはネズミ類などの餌を獲っていると考えられます。この屋敷林の周辺は複数の屋敷林や社寺林によって緑の回廊が形成されています。フクロウやオオタカが利用するためには、このようにある程度のボリュームがあり隠れ処となる樹林が必要です。

また屋敷林にはケヤキなど樹洞のある大径木が多く存在し、樹洞に営巣するムクドリやシジュウカラなどが繁殖しています。大きなケヤキには半寄生植物のヤドリギ類も着生しています。ヤドリギはヒヨドリやレンジャク類が種を食べて散布して広がる樹木です。

安曇野にはこうした人の暮らしと自然が織りなす里山的ともいえる豊かな自然環境があり、屋敷林もその役割を果たしているといえます。

(松田貴子)



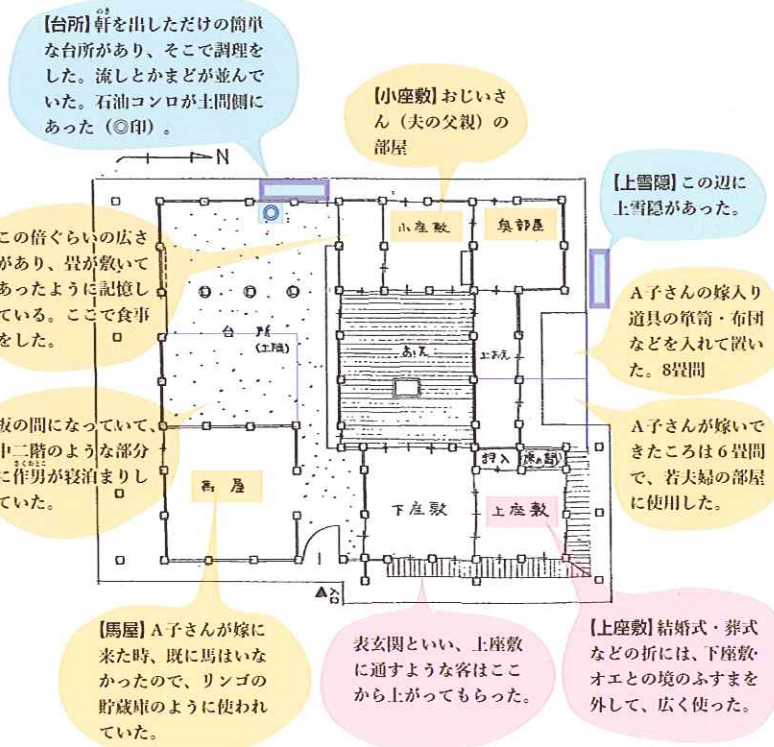
屋敷林内のオオタカがドバトを解体した痕

## ～ひと昔前の暮らしと自然素材の利用～ 安曇野の間取りと暮らし

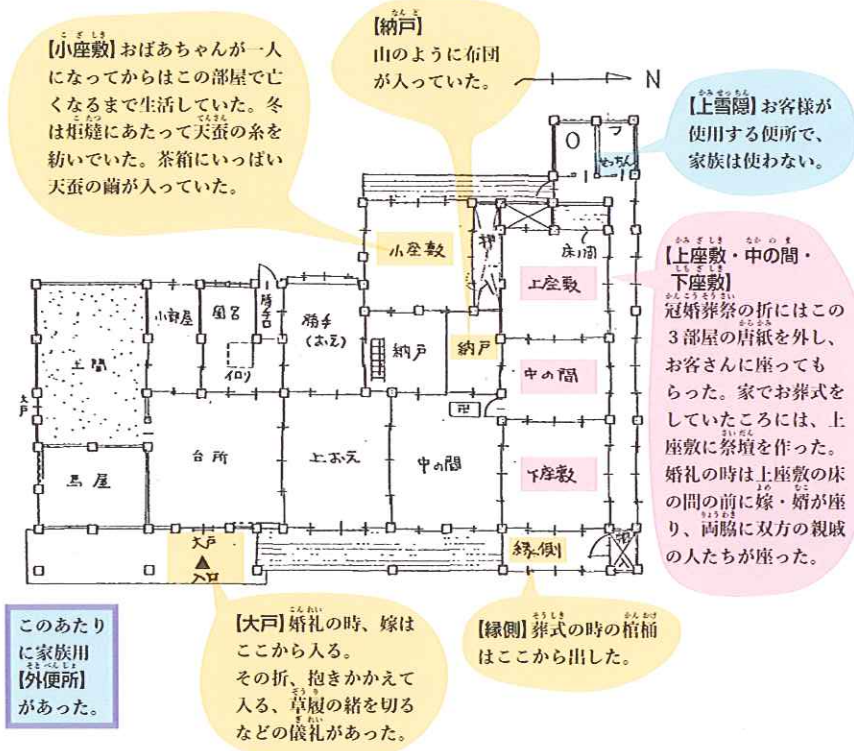
17世紀中期～後期の建物と推定されているA家

家は東向きにたてられている本棟造り。平入で大戸は開きになっていて、開いたときのための留め具もついています。大戸には障子のくぐり戸がつけられ、普段の人の出入りはこのくぐり戸を利用していました。厩から馬を引き出す時や、冠婚葬祭の折には大戸を開けたといいます。

現在の家はほぼ昔の形を復元していますが、家族が暮らしていたころはダイドコの半分ぐらいは板の間になっていました。



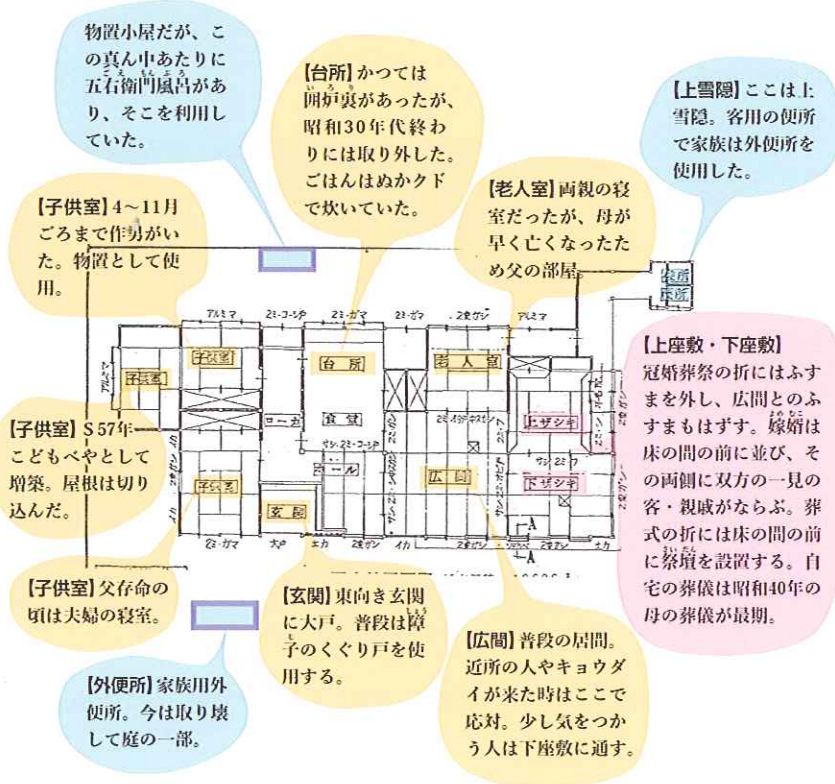
### 江戸時代中期（17世紀後半）ごろの造りといわれているB家



寄棟の平入。家は東に向けていて、玄関は大戸があり、障子のくぐり戸がついています。普段は障子戸を開け閉めしていましたが、冠婚葬祭の折には大戸も開け放ちました。

下座敷の縁側は式台として使われた部分ですが、昭和40年代ごろには、藤のテーブルセットなどを置いて、景色を見ながらくつろげる場所にしていました。

### 江戸時代末期ごろの家 C家



C家は寄棟の平入。東向きに建ち、屋敷林に囲まれています。屋根は現在も茅葺を維持し、昔の面影をとどめています。現在はもとの家を再生させて、部屋と外の境には大きなガラス戸を入れ、土台も昔より40センチくらい持ち上げて湿気を防ぐ手立てをほどこしました。

土台を上げたため、部屋からみる庭の雰囲気は昔と変わっていますが、庭木も大きく成長しているためでもあります。現在は屋敷林の枝葉が隣の家などに舞い落ちることがないように庭木の手入れも心がけています。

(倉石あつ子)

## 自然素材を利用した住まい ～屋根編～

地域で茅場を維持し、  
住民や親戚が協力して葺き替え

瓦や金属製品を使った屋根が普及する前は、家屋の屋根はどんな材料で作られていたのでしょうか？ここでは、その屋根づくりをご紹介します。ひとつは、2014年に穂高で行われた茅葺き屋根の葺き替えの様子です。



穂高で2014年に行われた茅葺き屋根の葺き替え（穂高）

かつて、農村の共有地には必ず「茅場」があり、春先に火入れをし、秋にカヤを刈り取ることで、草原が維持されていました。カヤは古来より人間にとって大変身近な材料であり、縄文時代から屋根材として利用されていたと考えられています。

茅葺き屋根の大規模な吹き替えは農閑期におこない、要所では職人が中心となりながら、集落の住民や親戚が協力して行なっていました。その後メンテナンス（定期的に傷んだところを取り替える）を行うことで屋根の持ちがよくなります。

今では限られたところでしか見ることができませんが、その技術は今も受け継がれています。

木材を繊維に沿って割る（折ぐ）  
板葺き屋根は水に強く長寿命

国重要文化財に指定されている曾根原家住宅（穂高有明）は17世紀中頃に建てられたと推定され、2018年に板葺き屋根の葺き替えが行われました。

屋根の材料にはヒノキ、サワラ、スギ、クリなど、筋目がよく通って削ぎやすく、水に強い材木が用いられます。木材を刃物で切るのではなく割ることで、木材の繊維が壊されず、水が浸透しにくくなります。また板と板の間に少しの隙間ができることで、屋根裏の通気を促し、木材の耐久性を高めます。江戸時代の農村には、必ず板を割る職人がいました。毎年、少しずつ自分たちでメンテナンスしながら、何十年に1度は職人によって規模の大きな改修をすることによって、屋根は100年以上維持することができるのです。

（松田貴子）



曾根原家住宅の屋根の葺き替え

〔写真撮影〕 武井孝夫（茅葺き屋根）、丸山隆（オオタカ解体場）

「ふるさと安曇野 きのう きょう あしたNo.18」  
編集 安曇野市豊科郷土博物館  
発行日 平成31年2月9日

安曇野市豊科郷土博物館  
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-8  
TEL：0263-72-5672 / FAX：0263-72-7772  
URL：http://azuminohaku.jp/